

第16章 阿南筍試験地における研究
第1節 研究の変遷

1. 試験地設立以前

福井村史によると明治42年(1909)には栽培面積が60 haとあり、すでにこの年代に本格的な経済栽培が行われていたようである。肥培管理もかなり集約的で、徳島県農会報第58号(明治45年4月29日)に川口達太郎のタケノコ栽培調査があり、購入肥料は大豆粕が10aあたり4枚(138kg)で、この成分は窒素9kg、リン酸1.9kg、カリ2.1kgとなり、これ以外にも自給肥料として堆きゅう肥、人糞尿、山草などが相当に施用されたようである。大正14年から昭和10年までは園芸作物の栽培奨励と普及を図るため県農事試験場が、那賀郡福井村高田(現阿南市福井町高田)岩佐文太郎氏のタケノコ園で早出し試験を実施した。



試験全体の明細な記録がなく、不明な点も多いが、目黒方式による根埋め方法と思われる。目的は1週間ないし10日の早出を目標に試験が行われて、10年のあいだに処理方法も改善されほぼ目的が達せられたようである。

この試験で使用された肥料は鯨粕、大豆粕、蹄角粉、棉実粕、米糠、きゅう肥、過リン酸石灰、硫酸アンモニア、草木灰、石灰で施肥の時期は5月と9月、施用成分は醗酵熟材料を含めると1aあたり、窒素4.2～6.5 kg、リン酸2.8kg、カリ1.7kgと割合に多い施肥量であり、収量も1aあたり72～104 kgと多く、当時は生産量も高かったようである。

2. 設立後

太平洋戦争の混乱で肥料不足などによる荒廃の時代が過ぎ、昭和30年(1955)に筍試験地が設立された。当時の10aあたりの収量は300kg前後で、昭和初期の状態に回復していなかった。施肥は硫安・尿素による窒素単用であった。

試験の主眼は合理的な施肥による増収と早期出荷による収益の増大を図ることであった。試験地開設と同時に関係者で協議の結果、当時の京都大学教授(現、同名誉教授)上田弘一郎博士の分析結果などを参考にして、窒素:リン酸:カリ＝10:5.5:6.5の配合比率で全国にさがけてタケノコ専用の有機入り県標準配合肥料を作った。5月に50%、9月に30%、11月に20%の割合の施肥基準で、当面の生産目標を10aあたり1tとして施肥改善指導を普及所・農協の連携で部落座談会を開催するなど強力に、かつ、きめこまかな指導を展開した。その結果5年後の昭和36年には3倍に収量は増大して第1目標は達成した。

その後生産目標を10aあたり1.5～2tとし、土壌改良と併せて施肥時期、施肥回数を考慮し施肥量の増加をはかったが、新竹の管理が伴わなかったことなどで、一部では過剰施用による濃度障害の心配もではじめた。このような実状のなかで農芸化学科によってタケノコおよびタケによる養分の収奪量の分析調査が行われたが、上田博士の発表したものに近い数値で案外と少ない量であった。収益増大の手段としての願望は早期出荷に結びつける栽培方法の確立であり、昭和32から37年までは敷草・客土・ビニールマルチ・灌水の組み合わせで試験を行い、3月末までに総収量の30～40%を出荷できる方法を確立したが、条件的な制約と労力と資材の点で普及には至らなかった。また、42～47年には電熱を利用して試験を行い、約40日出荷最盛期日を前進させることができ、普及に期待されたが、経済性の点で普及しなかった。53年度からは土作りを兼ねておが屑堆肥施用による早出し試験を実施したが、前述の敷草ビニールマルチ灌水試験とほぼ同じ結果を得た。おが屑堆肥による場合は灌水を不可欠の要素としないことと、方法によっては事後処理を必要としない点で普及性がある。課題としては搬送施用を堆肥生産サイドとタイアップして省力的、能率的に行うことである。

3. 竹材の流通

徳島県のタケノコ栽培はタケノコの主収入と竹材および枝条による副収入を目標に生産されてきた。昭和40年頃までは副収入によって主たる生産費の肥料代は賄えるほどであり、秋期の伐採による更新作業も現金収入につながる魅力ある作業であった。しかし新資材の開発によって竹材の産業・農業用など各種の生産資材としての需要が激減してきたため、伐採出荷しても採算割れとなることが多くなった。このため、伐採更新の不徹底としてあらわれ、タケノコの生産力の低下や病虫害の発生要因ともなりつつある。そこで竹材の利用拡大を図る実用化試験として昭和56年度から人工四角斑紋竹とゴマ竹の素材生産と1次加工の油抜きについて検討中である。

4. 病虫害

孟宗タケノコには栽培上病虫害に対する心配のいらないことが特徴であったが、試験地が設置された昭和30年、突如として葉を喰害する害虫タケアツバが阿南市福井町で75 haのタケノコ園に多数発生して問題となった。以後はめだった発生がなかったが、36年に再び大発生があり、阿南市全域の775 haで1～3回薬剤散布を余儀なくされた。その後は3～5年の周期で大きな発生があり、発生好適条件の場所では毎年多少にかかわらず発生している。他にも葉を喰害するものにメイガ類4種が認められているが現時点では生産量に影響がでるほどのものではない。

昭和53年ころからは早期に出荷するタケノコの外皮に原因不明の黒斑が目立つようになり、その為に規格落ちするものの割合は30%前後となり、価格は30～50%落ちとなり、原因究明と対応について検討中である。

病害では新竹更新の不徹底により、てんぐ巢病が急速に蔓延して部分的には深刻な状態となっている。本病については防除薬剤の効果について検討中である。